

新刊

□羽根田 治, 飯田 肇, 金田正樹, 山本正嘉: トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか. B5. 303 pp. 2010. ¥1,600+ 税. 山と溪谷社. ISBN 978-4-635-14014-0 C0075.

2009年7月に大雪山トムラウシ岳で, 15人の参加者(男5名女10名, 50代後半の女性2名以外は60才台)と3人のガイドから成るツアー登山のグループが悪天候のため遭難, ガイド一人を含む8名が疲労凍死した事件は, まだ記憶している人が多いだろう。

本書は事故調査委員会の記録をベースとし, できる限り当事者の話を聞いたうえで, 遭難の経過とその原因および今後の対策を客観的に述べたもので, すでに5刷を重ねている。大量遭難, 証言, 気象遭難, 低体温症, 運動生理学, ツアー登山の6章より成る。本書では「疲労凍死」という用語を使わず, 「低体温症」という単語を用いて, 医学的見地から, こういう事故は冬山ばかりでなく, 温度, 風, 水などの条件によって, 年間を通じてどこでもいつでも起こり得ることが強調され, その対策が述べられている。

最後の章は, 近年大流行の国内のツアー登山の危なっかしさに苦言を呈している。全国から集まった, 初対面で団結心がなく, レベルもまちまちなメンバーと, 旅行社が随時契約で別々に備った複数のガイドに率いられ, 帰りの宿舎や飛行機の予約に縛られながら歩くのだから, 日程の変更など考えられないのだろう。

一番不思議に思ったのは, 避難小屋に二泊(一泊目は夏期有人)しているのだが, 暖をとり濡れた体や衣服を乾かすための火が用意されていなかったことが, 問題にされていないことだ。参加者は食事を自前で用意し, ガイドが朝夕供給する湯で, 各人が調理して食べることになっている。無人の避難小屋だからこれは仕方がない。しかし濡れた衣服は, 張ったロープにぶら下げるだけで, それさえ寿司詰めの人達に滴が垂れるのを遠慮して, 濡れたまま着て寝た人もいるし, スペースがなくて, 濡れた床に寝た人もいる。これでは翌日まで疲れを持ち越して, 体力維持に支障があるだろう。小屋のまわりから薪を集めることは, してはならないくらいわかっている。それならば, 催行社側が, 全員が暖まれるだけの燃料とバーナーを用意し, ガイドがそれを運んで, せめて室内が

暖まり, 衣服を乾かすに足る熱源を用意するべきではないのか? 雨が降らなくても体は濡れるのだ。天気がよければこれは無用の空振りに違いないが, 参加者は空路で集合地の空港へやってくるのだから, ガスボンベや燃料入りタンクを持ち込めないことは, 分かりきっている筈である。集合してから各人がそれを用意しろというのは, 責任の押しつけだろう。狭い小屋の中で各人が火を扱ったら, 事故の元になることは自明である。

自然観察会でも月並みなところはもう飽きられて, 奥深い地域に入りたがる傾向があるようだから, 関係者は一度目を通しておくことをお勧めする。(金井弘夫)

□清末忠人: さんいん自然歳時記 IV. A5. 248 pp. 2011. ¥2,800. 今井書店鳥取出版企画室. ISBN 978-4-938875-78-7.

新聞に連載している, 自然にかかわる随筆を集めたもの。いわゆる博物学という単語でまとめられる鋭い観察眼と, 永年の経験や古典の知識に裏付けられた軽妙な語り口である。見開き2ページにカラー写真つきの一話で, 植物ばかりでなくキノコ, 魚, 昆虫, 貝, 風俗等々, 著者の多才ぶりを, 楽しみながら分けてもらえる。こういう先生の話しを聞いた子供はしあわせだろう。(金井弘夫)

□吉永英明, 大澤雅彦, 朱宮丈晴(編): ブータンヒマラヤの自然と登山—千葉大学のヒマラヤ。A4. 111 pp. 2011. 千葉大学学士山岳会. ISBN no number.

千葉大学山岳部は, 設立当初から東部ヒマラヤ, とくにブータンヒマラヤを目標としてきた。本書は千葉大学学士山岳会創立60年を記念するものである。彼らの遠征は登山ばかりでなく, メンバーの一人一人が, 独自の研究課題を持って行動することを特色としている。山岳部長の初代が沼田真氏, 次が大沢雅彦氏と, 植物生態学の研究者であったためか, そういうテーマのものが多く, 先頭8頁にわたって, 彼らが目指した高峰のカラー写真があり, 簡単な解説がある。次に第一部ヒマラヤの学術研究, 第二部ブータンヒマラヤの登山と踏査, 第三部ブータンヒマラヤに関するエッセイ, となっている。

第一部ではいわゆる植生ばかりでなく, 人の生活との関わりについての調査研究12件が見られる。ブータンからの留学生による, 自然資源の利

用や生物多様性保全についての調査報告もある。

第二部は、山岳会の記念誌ならこれが先に置かれるのが当たり前だが、このあたりが千葉大のユニークなところなのだろう。せいぜいが7,000m級とは言え、その位置がよく分からないピークを、現地へ行って特定してから登るのだから、こたえられない体験だったに違いない。行動地域概念図が示されている。

第三部は4人の著者によるエッセイで、民衆、風俗、スポーツ、医療、文化、植物など、それぞれのブータンの印象を語っている。一般配布は目的としないものだろうが、連絡先は次の通り。千葉大学学士山岳会：263-0022 千葉市稲毛区弥生町1-33。
(金井弘夫)

□中尾佐助、西岡京治：ブータンの花 [新版]. 21×26 cm 162 pp. 2011. ¥4,500 + 税. 北海道大学出版会. ISBN 978-4-8329-1395-0.

1984年に朝日新聞社から刊行された同名の本を、ブータン国王の来日を機に、ブータン当局の依頼により、西岡夫人・里子氏が再編集したもので、村田源氏、森和男氏の協力を得て、初版の体裁を維持しながら正誤を行うと共に、主として民俗植物関係の項目が追加されている。それらは「植物の装飾としての利用」「キノコ」「香をたく」「Yula竹とBangchuかご」「手織り機と織物」である。初版の文章に説明を追加した場合には、線で囲って示されている。また学名とその日本語読みの索引が付け加えられた。

本書では、植生とか花とかばかりでなく、植物が生活にいかん利用されているかという民俗植物の面が、いろいろ描写説明されていて、永らく彼の地で生活した西岡夫妻の知見と、中尾氏の観察が役立てられている。Bangchuは、向かい合せて押し込むと、ピタリとかみ合って物入れになる大小の笹のセットで、ブータンのみやげ物として名高い。私は「ポンチュウ」と記憶していた。ブータン国王夫妻が最近訪日したばかりなので、彼の国の理解を深めるよい材料になるだろう。私は初版を見ていたはずだが、この改訂版をあらためて見て、ヒンズー教の神体であるリングが立っている台座の円盤に、なぜ水の落ち口が付いているのかが、はじめてわかった(348図)。あれは油を搾る受け皿だったのだ。そうすると、リング自体の形が必ずしも金精形ではなく、大抵は黒光りした卵形であるのは、搾る材料を入れた袋を象徴し

ていると考えても、無理はあるまい。学名とそのカナ読みの索引がついている。最後に折り込み地図があり、頼りになる概念図が見られると共に、最近の道路網の発達を知ることができる。

(金井弘夫)

□リチャード・フォーティ(著) 渡辺政隆、野中香方子(訳)：乾燥標本収蔵1号室. B5. 451+10 pp. 2011. ¥2,500+ 税. NHK出版. ISBN 978-4-14-081473-4 C0040.

大英自然史博物館・迷宮への招待という副題がついている。三葉虫の専門家であるR. ForteyのDry Store Room No.1 of the Natural History Museumの訳本。同館で40年近くを過ごし、定年後もなおそこで研究にたずさわっている著者が、展示室からは想像もできない舞台裏(と言うよりここが本舞台)である、無数の標本収蔵室の扉を開けながら、そこで働く研究者とその仕事を紹介してゆく、という形で話しが進む。いずれもユニークな人たちで、堅苦しい書名に不似合わない、軽妙な叙述と訳文で楽しませてくれる。

多くは立派な業績をあげた研究者とその対象となった標本の話して、それぞれの分野の解説にもなっている。中には鳴り物入りで終身在職権を与えられ、ベレムナイトの化石の研究を引退するまで続けたのに、その間論文を一つも発表しなかったベアストウ、ビルトダウン人のドーソン、ネッシーを信じたタッカー、研究分野がcryptogamsであったため、cryptogramsの専門家と間違えられて暗号解読班に動員され、藻類学者ならではのテクニックで解読に貢献したタンディ、著名なアマチュア鉱物学者で「神の手」を持つ標本泥棒のキングズベリー、定向進化を信じたコケムシのラング、女性職員は決して同じエレベーターに乗らなかった植物学のロス等々、話しの種にこと欠かない。

学名、標本ラベル、基準標本などについての説明は入念で、最近のゲノム解読による系統の見直し、さらにそれに基づくフィロコードの意義にも言及しているが、これに頼り過ぎることに警戒していて、標本を対象とする研究の重要性が表明されている。ひとたび博物館へ取り込まれた標本は「どんなものでも決して捨ててはいけない」という大原則が、その実例を挙げながらあちこちで主張されている。彼らの組織は階層制がハッキリしていて、建物や標本室そのものの管理維持に当

たる階層、標本やラベルの制作と整理・維持に当たる階層、そしてその上に乗って仕事をする研究者とが、厳然と分かれているように思われ、このあたりが「人みな平等」というセンスのわれわれとは違うと感じる。

思いがけないことに、こんなところで「切手収集」という単語に出会った。原子物理学のラザフォードが「物理学こそが科学のすべてであり、そのほかはみな切手収集だ」と言っているそうだ。主語を入れ替えれば、「そのほかはみな」という部分が、今日ではもっと的が絞られているだけである。著者は本書のあちこちで、自然の中で対象を識別し、それが万人に分かるよう、名前をつけると言う行為の意義について主張している。私に言わせると、名前がついてしまうと、人は、もともとそういう名前をもつ対象が存在していたのだと思ひ込む習性があり、つけるまでに払われた努力には気付かないのだ。(金井弘夫)

□ Watson M. F., Akiyama S., Ikeda H., Pendry C. A., Rajbhandari K. R. and Shrestha K. K.(eds.): **Flora of Nepal Vol. 3.** 20 × 28 cm. 425 pp. 2011. Price. £90+post. (¥15,000 + post.), Royal Botanic Garden Edinburgh. ISBN 978-1-906129-78-1.

ネパール科学技術アカデミー、エジンバラ植物園、ヒマラヤ植物研究会が協力して企画した、ネパール植物誌の第一弾が出版された。Vol. 3はモクレン科～バラ科で、日本人としては大場秀章(ベンケイソウ科)、馬場由実子(モクレン科)、秋山 忍(ウメバチソウ科、ユキノシタ科)、池田博(バラ科)の諸氏が執筆している。また、数多くのネパール人研究者が名を連ねており、この事業が彼らの今後の研究活動に、大きな刺激となることだろう。

冒頭に、この Vol. 3 で用いられた標本の産地点が図示されていて、中部以東の中・高度のコースに地点が多く、西部はよりまばらで、低山地から平野にかけては情報が少ないことを示している。本書で扱われたグループが、暖温帯以上に産する

ものが多いことを反映するものだろう。

記述は、科の説明、属の検索表、属の説明、種の検索表、種の記述、土名、分布図、高度、生育地、花・果期、その他の解説、という順序で統一されており、他の巻でも同じスタイルをとることが決められている。分布図はネパール全域の地図に、産地のある district を黒塗りしたもので、すべての種類について一々表示されている。

Local name がデワナガリ文字と英字で記録され、それがネパール名かチベット名かが示されているのは、ネパール人研究者の貢献が大きいものと思う。Local name が分類学に合わせてついているわけではないから、それが無い種類ももちろん多いし、別な種類に同じ土名がついているものもある。

巻末にデワナガリ文字とその読み(英字)および学名の索引があるほか、今後出版予定の科名とその収容巻数が示されている。

本書では、新名の発表は意図していない。学名は、本書の出版以前に有効に発表されたものを採用している。ただし出版日時の都合などで、やむなく用いざるを得なかった二件が、釈明されている。これらの情報は、蓄積された電子データに基づいており、今後もデータベースの蓄積と公開を続けることによって、より多様な出力に対応できるとのことである。本書には植物図や標本写真はごく少なく、写真や詳細な分布図がないのは、このデータベースによって、画像や資料を参照できるからである。全部で10巻を予定しているとのことで、日本の研究者も大変な努力をせねばならないが、無事にこの大事業を完遂することを期待する。詳しくは下記の URL を参照のこと。 www.rbge.org.uk/publications/floraofnepal/volume3。シェルパへの謝辞(XX頁)の中に、Dawa Zambu Sherpa の名がないのは淋しい。彼がサーダーを勤めるようになって、東大ヒマラヤ植物調査は1972年以降安心して運用できるようになったのだが、知る人はもう少なくなった。

(金井弘夫)